

【書評】

**Michaela Fišerová, *Event of Signature. Jacques Derrida and Repeating the Unrepeatable*
(State of University of New York Press, 2022)**

高波力生哉

『署名の出来事』というタイトルと、副題にあるジャック・デリダの名を目にした瞬間、本書が「署名のアポリア」について考察した一冊だとある程度予想することができるだろう。すなわち、たった一度の出来事を刻印する署名が、署名として機能するためには反復されることによつてのみ可能であるという事態を分析した書物であると。事実、本書はこうした署名の性質がどのように生み出されるのかという前提から議論を始めており、その不可能性が「署名の出来事」と名指されている。だが他方で、署名の性質を単なるアポリアとして提示するだけでなく、一つの哲学的な問題として議論を展開している点が本書の大きな特徴である。以下、順を追ってその内容を見ていきたい。

著者のミカエラ・フィシェロヴァはプラハメトロポリタン大学の准教授であり、デリダ、ドゥルーズ、フーコー、ランシエール、ナンシーを中心とした現代フランス哲学、視覚研究、美学を専門としている。スロバキアのコメンスキー大学で哲学の博士号を取得しており、現在までに『目に見えるものを分有する——フーコー再考』(*Partager le visible: Repenser Foucault*, 2014)、『イメージと権力——フランスの思想家たちとの対話』(*Picture and Power: Interviews with French Thinkers*, 2015) など、チェコ語、英語、フランス語で執筆された4冊の単著がある。本書は2016年にチェコ語で執筆された『署名の脱構築』に改訂を施し、著者自身によつて英訳されたものである。

署名の出来事を哲学的な問題として議論する際に軸となるのは、三つの形而上学的期待 (metaphysical expectation) である。その三つとは (1) 手書き署名 (handwritten signature) が、署名者の心 (soul) を明らかにする。(2) 手書き署名は署名者の痕跡 (trace) の真正さ (authenticity) を保証する。(3) 手書き署名によつて、第三者が署名者の同一性 (identity) を認識することができるというものである。本書がデリダの著作の読解を通して取り組むのは、こうした前提がいかにか不可能であるかの解明である。七つの章からなる本書は、大きく二つのパートに分けることができ、前半 (第一章から第三章) は、形而上学的期待がどのように生み出されているかの分析に、後半 (第四章から第七章) は、デリダの議論を用いて、いかにかこうした期待が裏切られるかの分析に充てられている。

前半の議論では、まず署名者の生 (life) と署名の法 (law) との間の隔たりが確認される (8頁)。署名の法は署名者本人の同一性を確認するために、自身が以前に記した署名と全く

同じ署名をするよう署名者に求めるが、署名者はそれをみずからの手を使って繰り返すことはできない。その理由は当然、全く同じように署名をしようと努めたところで、手書きではその都度異なった署名しか記せないからである。しかし、それぞれ 19 世紀と 20 世紀に発達した筆跡学 (graphology) と法医学的分析 (forensic analysis) は、その都度異なる署名であっても、署名から署名者を必ず同定できるという前提に基づいた科学であった。そして筆跡学、法医学的分析が持ち得るこうした言説的期待 (discursive expectation) は、三つの形而上学的期待によってであるということが明かされる (63 頁)。そして、三つの形而上学期待がそれぞれ、(1) 類似性、(2) 痕跡の真正さ、(3) 反復というキーワードで提示され、これらがデリダの著作の読解を通して脱構築されることになる。

後半はこうした三つのキーワードの分析にそれぞれ三章が充てられている。「類似性 (similarity)」については、デリダのバンヴェニスト読解に基づき、類似性と同一性の間の同等な関係を生み出す連辞の使用に焦点を当てている (102 頁)。デリダにおいては、署名が認識可能となるのは、署名者の以前の痕跡が断片的、亡霊的類似性を生み出しているからであり、それは署名者自身の自然な表現ではなく、むしろ自己-模倣の代補なのである。「痕跡の真正さ (authenticity of trace)」においては、主にデリダによるオースティンの言語行為論批判が検討されており (118 頁)、寄生的な反覆可能性によって、あらゆる「書く」という行為は、散種された痕跡を生み出すという必然性が確認される。「反復 (repetition)」については、「類似性」と「痕跡の真正さ」の議論を踏まえ、手書き署名の不可能な条件が明らかにされる (152 頁)。その条件とは、一方には署名者が自身の以前の署名を意図的に模倣するという反復があり、他方には模倣や反復を意図しない偶然的な反覆があり、この両者が認識可能な署名のスタイルを成り立たせているというものである。最終章では、こうした署名のスタイルについて、デリダによるルソー読解の分析を通して、「反復不可能なものの反復 (repeating the unrepeatable)」という「署名のアポリア」を結論づけるに至る。

以上が概観となるが、一言で述べてしまえば本書はあくまでも署名論であり、デリダ論ではない。すなわち、「署名のアポリア」がいかに解決不可能かという問題圏の中で全体の議論が進んでいく。そのため、本書をデリダ論という期待のもとで読み進めると若干の物足りなさを感じてしまうことは否定できない。だが、第四章以降で展開されるデリダ読解は極めて堅実であり、論の運び方も実に丁寧になされているため、後半のパートを一つのデリダ論として読むことができることもまた事実である。いずれにせよ、今後「署名のアポリア」をめぐって考察を行う際、必ず参照されるべき一冊である。